フィンランド語の名詞修飾における出格と分格の用法*

千葉 庄寿 ちば しょうじゅ
東京大学大学院
e-mail: shoo@gengo.L.u-tokyo.ac.jp

1 はじめに

フィンランド語の名詞 osa 「部分」が他の名詞に修飾されて 「~ の一部」という名詞句をつくる際に、「~ の」を表す名詞は出格、分格で現れる[1]。

(1) *osa* *aineisto-sta* ; *suurin* *osa* *arabi=ma-i-sta*
部分 資料-ELA 殆どの 部分 アラブ=国-PL-ELA
「資料の一部」; 「アラブ諸国の殆ど」(sk87)

(2) *osa* *elämä-ä* ; *osa* *raho-j-a*
部分 生活-PAR 部分 お金-PL-PAR
「生活の一部」; 「資金の一部」

フィンランド語には、osa 「部分」に代表されるような、出格、分格による修飾をうける一連の語群が存在する。

本発表では、フィンランド語の雑誌コーパスからのデータをもちいて、osa 「部分」を修飾する出格と分格の用法について論じる。名詞修飾の出格と分格の用法について、修飾語自体の定性によって格が決まるとする先行研究の分析は、実際の osa の用例と必ずしも合致しない。調査の結果、修飾語の格の現れ方は、被修飾語 osa の現れる環境に著しい影響を受けていることが確認された。より具体的には、以下の 2 つの分布傾向がコーパスデータの分析から見い出された :

- osa が節の述語である場合、その修飾語は分格で現れることが多い。
- それ以外の場合には、修飾語は出格であらわれる方が分格よりも多い。

以下、まずフィンランド語の名詞修飾について概観し、osa の意味と修飾語の格との関係を大雑把につかんだ後、実際に、雑誌コーパスから採取した出格、分格修飾語を含む osa の用例を検討する。

---

*本発表での分析は、フィンランドの週刊誌 *Suomen Kuvalehti*の 1987 年の記事を収録した電子コーパス (sk87) からのデータに多くを依っている。コーパスはヘルシンキ大学一般言語学科の Unix サーバに収められており、収録語数はおよそ 150 万語である。コーパスの利用を許可して下さった同学科に感謝する。

[1] グロスでは形態素をハイフン - で、また複合語の成分を等号 = で区切った。またマーカーの顕在しない語形のもつ情報は、ピリオド . に続けて表記する。複数の文法情報を同時に表すマーカー (いわゆる鞄型形態素) のグロスにも、ピリオドを用いる。例文に用いた略号は以下のとおり :

ABL=奪格;ADE=接格;AKK=対格;ALL=向格;be=コピュラ;EINF=第 2 不定詞;ELA=出格;ESS=様格;GEN=属格;ILL=入格;INE=内格;NEG=否定の小辞;NOM=主格;PAR=分格;PASS=受動;PAST=過去;PL=複数;POSS=所有接尾辞 (+人称、数);PP=過去分詞;Q=疑問の小辞;SG=単数;TA INF=第 1 不定詞; TRA=変格;VNEG=否定動詞;1,2,3=人称;&=列挙の小辞

例文の出典に関する略号は以下のとおりである :

SKPS = *Suomen kielen perussanakirja* からの例文; sk87 = *Suomen Kuvalehti* の 1987 年の記事を収録したコーパス

2　フィンランド語の名詞修飾について

フィンランド語で名詞を修飾できるのは、名詞、形容詞、動詞の分詞形と若干の付加詞である。被修飾名詞との結合の度合の緩い付加詞 (不定詞等) を除くと、その修飾の方法から、名詞修飾は、名詞によるもの、および動詞の分詞形と形容詞によるもの、の 2 種類に分けることができる。

動詞の分詞形、または形容詞の場合、修飾語は修飾される名詞の前に置かれる。動詞の分詞形の例を (3) に、形容詞の例を (4) に示す。修飾される名詞が活用した場合には、修飾語は被修飾語と数と格が一致する (3–4b)。

(3)　**a.** *iso*　　*kattila*　;　**b.** *iso-ssa*　　*kattila-ssa*
　　大きな.NOM　鍋.NOM　　大きな-INE　鍋-INE
　　「大きな鍋」;　「大きな鍋 (の中) で」

(4)　**a.** *syötävä*　　*sieni*　;　**b.** *syötävä-i-ä*　　*sien-i-ä*
　　食べられる.NOM　キノコ.NOM　　食べられる-PL-PAR　キノコ-PL-PAR
　　「食べられるキノコ」;　「(多くの) 食べられるキノコ」

これに対し、名詞が名詞を修飾する場合、被修飾語の数、格との一致は起こらず、修飾語の格は常に保持される。名詞の修飾は、修飾語と被修飾語との位置関係から、修飾の種類を、属格によるもの、およびその他の斜格によるものとに下位区分できる。

属格 (接尾辞 *-n*) による名詞修飾は、最もニュートラルな名詞修飾であり、殆どの名詞を修飾することができる。特殊な文体を除き、属格形は名詞の前におかれてその名詞を修飾する (5) :

(5)　*Janne-n*　　*pallo*
　　ヤンネ-GEN　ボール.NOM
　　「ヤンネ (人名) のボール」

属格による修飾で表される被修飾語と修飾語との意味的関係のうち、主なものは次の 3 つである。(α) 所有関係をあらわす場合 :上記の例文 (5) では、*Janne-n* (ヤンネ-GEN) は所有者で、*pallo* は被所有物である ;(β) 部分–全体の関係を表す場合 (以下の例文 6) ;(γ) 修飾語と被修飾語の関係がより曖昧で、属格修飾語が被修飾語の表す意味を補足するような場合 (例文 7)。

(6)　*puu-n*　*juuri*
　　木-GEN　根
　　「木の根」

(7)　*leivä-n*　　*pala*
　　パン-GEN　一片
　　「パン (の) ひと切れ」

今回、考察の対象とする出格 (接尾辞 *-sta/-stä* [2])、分格 (接尾辞 *-(t)a/-(t)ä*) による修飾は、属格以外の斜格による修飾の部類に属する。動詞、形容詞、また属格による名詞修飾と違い、修飾語は基本的に被修飾語の後にくる。

出格と分格による名詞修飾の場合、修飾語と被修飾語は、属格修飾の場合の (γ) にほぼ相当する意味的関係をもっている (例文 8)。

(8)　*pala*　*leivä-stä*　/　*leipä-ä*
　　一片　パン-ELA　/　パン-PAR
　　「ひと切れのパン」

[2] 接尾辞の母音の質は母音調和によって決まる。次の分格語尾も同様。

出格や分格が修飾語として現れるとき、被修飾語となるのは、部分や量、単位といった概念を表す語であることが多い (Penttilä1963[2]:367,399; Vilkuna 1997:194–5)。今回の発表では、そのような出格、分格の修飾語をとる語のうち、比較的頻度が高い名詞 osa 「部分、一部」に注目し、osa につく 2 種の修飾語の用法を考察していく。具体的な分析の前に、osa の意味と修飾語の格の関係について、若干説明しておく。

3 osa の意味と修飾語

osa は、大きく分けて 3 つの異なる意味をもつ (*Suomen kielen perussanakirja* (SKPS) の記述に基づく)。同辞書からの例文とともに以下にまとめる。

(i) 部分、一部 : *suurin osa sairauks-i-sta*
殆どの OSA 病気-PL-ELA
「病気の大部分」(SKPS)

(ii) 部品 : *palaperi-n osa-t*
ジグソー-GEN OSA-NOM.PL
「ジグソーパズルのピース」(SKPS)

(iii) 役割、地位 : *Euroopa-n veturi-n osa*
ヨーロッパ-GEN 牽引車-GEN OSA
「ヨーロッパの牽引車の役」(SKPS)

それぞれの意味に添えられた例文からもわかるように、osa の修飾語として、出格と分格だけではなく、属格が現れることがある。しかし、属格による修飾と出格や分格による修飾は osa の意味に関しある程度のすみわけができている。(i) の意味の osa は出格、分格によって修飾されるのが普通で、属格が (i) の osa を修飾することは比較的少ない。逆に、(iii) の意味の osa を修飾する場合は常に属格が用いられ、出格や分格による修飾は不可能である (例文 9) :

(9) *esiinty-ä Hamleti-n osa-ssa / *osa-ssa Hamleti-sta*
出演する-TAINF ハムレット-GEN 役-INE / 役-INE ハムレット-ELA
「ハムレット役で出演する (こと)」(SKPS)

さらに、修飾語が属格であるか、それとも出格または分格かで、しばしば意味解釈に違いが生じることがあるが、この場合も、対比されるのは (i) と (iii) の意味である。例えば、例文 (10) では、修飾語が出格の場合は (i) の意味に、属格の場合 osa は (iii) の意味に解釈される :

(10) *osa me-i-stä* VS. *me-i-dän osa(-mme)*
OSA 私-PL-ELA 私-PL-GEN OSA(-POSS 1PL)
「我々の一部」VS. 「我々の役割」

他方、(i) と (ii) の間には、意味論的にも、また修飾語の格の現れ方の点でも厳密な境界線を引くことは難しく、(ii) 「部品」の意味であっても、属格の他に出格、分格修飾語が用いられることがある。以下はコーパスからの用例である。

(11) ··· *kannattaa-ko kaikki irtoava-t osa-t traktore-i-sta* ···
すべき-Q 全て 外れる-NOM.PL 部品-NOM.PL トラクター-PL-ELA
hitsa-ta tiukasti kiinni.
溶接する-TAINF しっかり 止めて
「トラクターのすべての脱着可能な部品をがっちりと溶接した方がいいのかどうか」(sk87)

これまでの事実は、どれも出格と分格が共通した性質をもっていることを示している。では、出格と分格では、修飾語としての用法にどのような違いがあるだろうか。そこで次に、出格と分格の用法の違いに関する先行研究の提案を、osa の用例を参照しながら検討してみよう。

4　出格、分格修飾語の意味解釈

先行研究では、様々な術語を用いて 2 つの格の意味の記述が試みられてきたが、その主眼点は、修飾語の定性の解釈にあるということができる。Penttilä (1963[2]:400) は、出格修飾語と分格修飾語では定性に関して違いがあり、出格修飾語は定、分格は不定の解釈をもつと述べている。同様のアイディアを、例えば Alho (1992) は set と kind という用語で論じており、Hakulinen & Karlsson (1979:120) は集合の概念を用いて説明している。

修飾語の格がそれ自身の定性によって決まる、という考えは、単位を表す語を例にとるとうまく説明できる。例えば、(8) で挙げた *pala leivä-stä*/*leipä-ä* (一片 パン-ELA/パン-PAR) 「ひと切れのパン」を例に挙げると、以下の例文 (12) では、パンは単に物質名詞として解釈され、従って特定されない。一方、例文 (13) では、特定のパンのひと切れがなくなったことが含意されている：

(12)　*Lapse-lle*　*anne-ttiin*　*pala*　*leipä-ä.*
子供-ALL　与える-PAST.PASS　一片.NOM　パン-PAR
「その子には一切れのパンが与えられた」(Hakulinen & Karlsson 1979:120)

(13)　*Yksi*　*pala*　*leivä-stä*　*oli*　*jo*　*huven-nut.*
1　一片　パン-ELA　be.PAST.3SG　既に　なくなる-PP
「パンがひと切れもうなくなってしまっていた」(*ibid.*)

このように、少なくとも pala 「一片」の修飾語の格は、定性による解釈を非常によく反映しているように思える。

しかし、出格、分格修飾語をとる全ての語において、同じように解釈の違いが得られるわけでは決してない。osa 「部分」の場合を考えてみよう。コーパスに現れた用例からは、特定の事物が含意されても分格が用いられている例がしばしば見い出される。例えば、以下の例 (14) では、分格で示されている修飾語は指示形容詞のついた名詞 *tä-tä kaupunki-a* (この-PAR 都市-PAR) であり、(15) では代名詞 *si-tä* (それ-PAR) が分格で現れている。文脈から判断して、分格であるにもかかわらず、どちらも定と解釈すべきであると思われる。

(14)　*Jännittee-t*　*ja*　*ulottuvuude-t*　*o-vat*　*osa*　[　*tä-tä*　*kaupunki-a*　].
緊張-NOM.PL　と　相-NOM.PL　be-3PL　部分　この-PAR　都市-PAR
「緊張と多様性はこの街の一部である」(sk87; Vilkuna 1997:195)

(15)　*Marja*　*Kanervo*　*halua-a*　*taitee-see-nsa*$_{\mathbf{i}}$　*tarvi-tta-e-ssa*　*esteettise-n*
M.　K.　欲する-3SG　芸術-ILL-POSS3SG$_{\mathbf{i}}$　必要だ-PASS-EINF-INE　審美的-AKK
elementi-n$_{\mathbf{ii}}$,　*se*$_{\mathbf{ii}}$　*on*　*osa*　*si-tä*$_{\mathbf{i}}$　*niinkuin*　*rumuus-kin.*
要素-AKK$_{\mathbf{ii}}$　それ.NOM$_{\mathbf{ii}}$　be.3sg　部分.NOM　それ-PAR$_{\mathbf{i}}$　のように　醜さ-&
「M. K. (人名) は彼女の芸術$_i$に必要とあれば審美的な要素$_{ii}$を求める；醜さがそうであるように、それ$_{ii}$はその$_i$一部なのである。」(sk87)

代名詞に限らずとも、以下の例文 (17) のように、明らかな定の名詞句は出格 (例文 16) ばかりでなく、分格でも現れる。

(16)　*suurin*　*osa*　[　*rajan*　*yli*　*pyrkiv-i-stä*　]
最大の　部分　国境-GEN　越えて　試みる者-PL-ELA
「国境を越えようとする者のほとんど」(sk87)

(17)　*osa*　[　*asunno-n*　*myynni-stä*　*saatu-j-a*　*raho-j-a*　]
部分　住居-GEN　売却-ELA　得られた-PL-PAR　お金-PL-PAR
「住居の売却から得られた資金の一部」(sk87)

このように、一見すると明解な修飾語の定性による説明を osa の修飾語の格の用法に適用すると、多くの問題が生じるのはなぜであろうか。このような用例の検証からは、osa 「部分」のような抽象的な名詞においては、修飾語の定、不定の違いはそれほどシャープな解釈のコントラストを生まない、という印象が得られる。

	osa の修飾語の格		
	出格	分格	小計
A. **S**v(x)	269 (92.8%)	21 (7.2%)	290 (100%)
B. sv**O**	70 (86.4%)	11 (13.6%)	81 (100%)
C. **O**v-PASS, v-PASS**O**	45 (93.8%)	3 (6.3%)	48 (100.1%)
D. sv-BE**C**	7 (7.3%)	89 (92.7%)	96 (100%)
合計	391	124	515

表 1: 基本構文パターン毎の osa の修飾語の格の分布。osa の位置は下線で示してある。

5 コーパスデータに基づく出格、分格修飾語の分布の分析

では、osa の修飾語の格の選択には、どのようなファクターが関与しているのであろうか。修飾語の定性によって意味解釈に差がない場合、出格、分格修飾語は自由に交替しうるのであろうか。

２つの格の用法を分析するもう一つの方法として、用例分析を通じて出格、分格修飾語がどのように用いられているのかを経験的に調べることが考えられる。今回は、osa が現れた環境によって、修飾語の格のうちどちらがより用いられ易いかに差があるのではないか、という予測のもと、節内の文法的な情報を利用して雑誌コーパスから採取した osa を含む用例[3] を分類したデータベースを作り、osa の出現環境毎に、osa を修飾する出格、分格の相対頻度を調べた。その結果、排他的な出現領域こそ見い出せないものの、出格と分格とは、かなり異なった出現傾向を示していることがわかった。

コーパスから得られた osa の用例は、全部でおよそ 900、そのうち、出格、分格の修飾語をとって現れた例は 700 あまりであった。全体としては、出格修飾語が 522 例に対し分格修飾語は 201 例と出格修飾語の頻度のほうが高かった。

簡便を期し、以下では、頻度の高い次の４つの基本的な構文パターンで現れた用例を中心に論を進める ：

A. 節の先頭に主語が現れ、osa が主語の位置にある場合。略号**S**v(x)

B. 節の先頭に主語が現れ、osa は他動詞の目的語の位置にある場合。目的語ふうの副詞 (e.g. *juoksi* **tunni-n** 「1 時間走った」) は含まない。略号 sv**O**

C. 節の主動詞が受動形で、osa が目的語である場合。動詞と目的語の相対語順で修飾語の格の分布に変化はなかった。略号**O**v-PASS,v-PASS**O**

D. コピュラ動詞 *ol-la* (be-TA$_{\text{INF}}$) を節の主動詞とする 「A は B である」という構文で、osa が B の位置、つまり述語として節の末尾にある場合。略号 sv-BE**C**

４つの構文パターンで、osa の現れる環境はそれぞれ異なる。これら環境毎に、osa の修飾語の出現頻度と相対比率を示したのが表 1 である。興味深いことに、出格と分格の出現傾向は、A–C.

[3] データには、単語としての osa の他に、osa でおわる複合語の例も加えられている。例 ：*valta=osa yleisö-stä* (大=部分 人々-ELA) 「大部分の人々」(sk87)。出格、分格修飾語をとって現れた、osa でおわる複合語は 131 例あった。

と D. の間で大きく変化する :分格修飾語は、今回取り上げた 4 つの基本構文の中では唯一、D. の述語の位置にある場合にのみ、出現頻度で大きく出格に勝っている ;一方、その他の環境では、分布は逆転しており、出格の出現頻度が圧倒的に高い。出格の頻度的優勢は A–C. を通じ 9 割でほぼ一定している。

以下に、A–D. それぞれの基本語順の用例を挙げる :

(18) A. **Sv(x)** *Suuri osa* *kansa-sta* *ratkaise-e* *puolue=kanta-nsa* *vasta*
大部分.NOM 国民-ELA 決める-3SG 政党=支持.AKK-POSS3SG やっと
vaali=taistelu-n *loppu=suora-lla.*
選挙戦-GEN 最終=ライン-ADE
「国民の大部分は、自分がどの政党を支持するかを選挙戦も終盤になってから決める」(出格 :269 例)

(18b) *vain* *pieni osa* [*valaa-n* *selkä-ä*] *on* *näkyvissä* ···
だけ 一部.NOM 鯨-GEN 背-PAR be.3SG 見える
「鯨の背の一部だけが見える···」(分格 :21 例)

(19a) B. **svO** *Anders* *rakasta-a* *tä-tä* *osa-a* *city-stä.*
A. 愛する-3SG この-PAR 部分-PAR シティー-ELA
「A.(人名) はシティーのこの部分が好きだ」(出格 :70 例)

(19b) *Syyria* *osta-a* *suurimma-n* *osa-n* *ase-i-ta-an* *Neuvostoliito-sta* ···
シリア.NOM 買う-3SG 殆どの-AKK 部分-AKK 武器-PL-PAR-POSS3SG ソビエト-ELA
「シリアは、武器の大半をソビエトから購入する」(分格 :11 例)

(20a) C. **Ov-PASS, v-PASSO** ··· *ja* *häne-lle* *palaute-ttiin* *osa* [*takavarikoidu-sta*
そして 彼-ALL 返還する-PAST.PASS 一部 没収された-ELA
omaisuude-sta.]
財産-ELA
「そして彼に没収された財産の一部が返還された」(出格 :45 例)

(20b) *Demokraattisin* *osa* *juhlaviikko-j-a* *ava-ttiin* *19. elokuu-ta.*
最も民主的な 部分 ヘルシンキフェスティバル-PL-PAR 開く-PAST.PASS 8 月 19 日に
「ヘルシンキフェスティバルの最も民主的な部分は 8 月 1 9 日に始まった」(分格 :3 例)

(21a) D. **sv-BEC** *Se* *on* *melko* *pieni* *osa* [*koko* *trading-toiminna-sta-mme*] ···
それ be.3SG かなり 小さい 部分 全 取り引き=活動-ELA-POSS1PL
「それは、我々の取り引き活動のほんの一部に過ぎません」(出格 :7 例)

(21b) *Suomi* *on* *osa* *Eurooppa-a.*
フィンランド.NOM be.3SG 部分 ヨーロッパ-PAR
「フィンランドはヨーロッパの一部である」(分格 :89 例)—上記例文 (14–15) も参照

6 まとめ

参考文献

Alho, Irja H. 1992 "Distinguishing kind and set in Finnish" *Studies in the Linguistic Sciences* 22/1:1–16.

Hakulinen, Auli and Fred Karlsson 1979 *Nykysuomen lauseoppia.* Helsinki: Suomalaisen Kirjallisuuden Seura.

Hakulnen, Auli, Fred Karlsson & Maria Vilkuna 1980 *Suomen tekstilauseiden piirteitä: kuvantitatiivinen tutkimus.* Helsinki: Department of General Linguistics, University of Helsinki.

Penttilä, Aarni 1963[2] *Suomen kielioppi.* Porvoo, Finland: Werner Söderström.

Suomen kielen perussanakirja. 1990–94 Helsinki: Kotimaisten Kielten Tutkimuskeskus.

Vilkuna, Maria 1996 *Suomen lauseopin perusteet.* Helsinki: Edita.